書　　評

曽田長宗・若月俊一・柳沢文徳（編）『農 村 保 健』

医学書院，1969年，B5：目次10＋406 pp.

1969年10月第4回国際農村医学会が長野県・佐久総合病院で開催され，「農業における中毒の問題」，「農業における人間工学」，「農業における人畜共通伝染病の問題」，「農村生活とその健康に及ぼす影響」を学術テーマとしてとりあげている．それらは早急に解決をせまられている問題で，その会議の開催の意義は大きなものといえよう．

本書はそれより前に発刊され，農村居住者や農業従事者およびその家族の健康上の障害や，その改善を行う上にどのような矛盾と障害があるのかを明らかにするため，農村生活の社会経済的背景，生産・消費生活などの健康に及ぼす弊害の実態，健康・福祉向上への住民の自覚活動などの現状分析，批判ならびに今後のすすめ方の方向づけなどを課題としている．本書は曽田長宗，若月俊一，柳沢文徳3氏の編集による43氏の分担執筆で，それぞれ農村医学会，公衆衛生学会，社会医学，厚生連や行政官庁関係などの広範囲にわたる分野で活躍している人々であり，本書の序言にものべられているように戦後における農村居住者の健康上の問題の解明の手がかりとして有用な教科書としても大いに役立つことであろう．農村関係研究者，農民の自覚活動に協力し推進する保健医療関係者，地方・中央の行政担当者のための参考書となるばかりでなく，一般人ならびに医学生にも農村保健を知るために是非一読をすすめたい書である．

内容は7章からなり，第1章においては，農村居住者の不健康，その直接的原因である社会経済的背景，健康改善のための保健対策，保健行政の立ちおくれなどについて総説し，問題点の提起をも行っている．第2章では，農村の社会構造，農業技術，農業経営と農家生活，農家人口の最近の変動など農村保健の背景を社会学的観点からその特性を明らかにしており，本章は本書の特徴の一つをなしている．

つぎに第3章では，農村生活について公衆衛生学的見地から，環境，栄養，労働について農村地域の特殊性がのべられている．ことに，農家の労働力不足や兼業化による主婦の労働と疲労，主婦農業と乳幼児問題，老人問題などについて書かれている．

第4章の農村の健康と疾病では，伝染病，寄生虫症(又は地方病)，農夫症，農薬中毒症，外傷（農機械による）など農民に特有であるもの，又は発生の多い循環器，消化器，運動器等の疾病について動態統計，患者統計，実地調査など豊富な資料を示しながら，疫学的，社会医学的観点から考察を行っている．環境的不利や衛生知識の不足が引き起す農村の疾病構造の特異性などがここで明らかにされている．

第5章では農村における保健活動について，その活動をすすめるための社会踏査，公衆衛生調査の必要性ならびに方法，行政機関としての保健所のあり方，地方自治体の保健衛生事業，衛生教育，学校保健，農村医療の現状などが詳しく解説されている．「農村保健の課題は農民の個人的貧乏の追放だけでなく，農民の共同の貧乏を考えなければならない」，「学校における児童・生徒の保健教育と組織活動の徹底と強化は農村保健向上に対する大きな原動力であるばかりでなく，その効果を倍加する」など農村保健活動対策に一つの方向を示すものと考えられた．

第6章では特殊地域における農村保健の問題点を北海道，東北，中部，九州，漁村，僻地などの実地調査にもとづき，地域的特殊性の所在を明らかにしている．また近年問題とされている出稼ぎ農民の労働と疾病に関する実態についても示されている．

最後の章は，将来における農村保健の向上についてのべ ① 農村，農民，農家の生活条件に応じた具体的保健活動の実現 ② 農民自身の農村保健活動推進の必要性を強調し，近い将来「暗い農村」の絶滅を希望している．

（荻野　嶋子）